

補足 大腸炎・小腸炎・重度の下痢

臨床症状・検査所見

(1) 臨床症状¹⁻³⁾

- 持続性または反復性の下痢、発熱、粘血・血便、腹痛など
- 食欲低下や全身倦怠感などの全身の症状を伴う

(2) 検査所見^{2,4)}

- CT：腸間膜の浮腫、腸粘膜の肥厚や腸管壁の菲薄化を認めることがある
- 下部内視鏡検査：軽度の紅斑から重度の炎症（粘膜の脆弱性または潰瘍）を認める
- 病理組織検査：陰窩炎を伴う炎症細胞浸潤を認める

感染症などの鑑別のため便培養検査、他の炎症性腸疾患の鑑別のため生検組織診断も重要です。
内視鏡検査や病理組織検査は、専門医へ相談の上、実施を検討してください。

参考文献

- 1) 田中良哉編. 病態と治療戦略がみえる 免疫・アレルギー疾患イラストレイテッド, 羊土社(2013)
- 2) 日本臨床腫瘍学会. がん免疫療法ガイドライン第3版, 金原出版(2023)
- 3) Schneider BJ. et al.: *J Clin Oncol.* 39: 4073, 2021
- 4) Haanen J. et al.: *Ann Oncol.* 33: 1217, 2022

ガイドライン等による対処法の補足 (対処法はP.18参照)

- 副腎皮質ホルモン剤の開始により、3日以内に改善が認められない場合、免疫抑制剤（インフリキシマブ、ベドリスマブ*など：インフリキシマブの効能又は効果はP.131を参照）の追加投与を検討することが、がん免疫療法ガイドライン¹⁾及びASCOガイドライン²⁾に記載されています。
※キイトルーダ®投与後に発現した大腸炎・小腸炎・重度の下痢に対して免疫抑制剤の有効性は確立されておらず、保険適応外です。
- 副腎皮質ホルモン剤の長期投与が必要な患者に対し、日和見感染予防が必要であるとASCOガイドライン²⁾に記載されています。

参考文献

- 1) 日本臨床腫瘍学会. がん免疫療法ガイドライン第3版, 金原出版(2023)
- 2) Schneider BJ. et al.: *J Clin Oncol.* 39: 4073, 2021

*ベドリスマブの主な効能又は効果は以下のとおりです。

効能又は効果

中等症から重症の潰瘍性大腸炎の治療及び維持療法(既存治療で効果不十分な場合に限る)、中等症から重症の活動期クローン病の治療及び維持療法(既存治療で効果不十分な場合に限る)